

[発行日]=2000年12月12日

[本文]

日本では、いまだに不景気という言葉のあらしが吹き荒れている様子らしいが、実情はどうなのか、本当のところ、よく理解できない。

絶えず危機感をあおり、いつも世界経済のトップグループを走っていないければ、やっていけない風土であり、国民性なのだろうと、推測するしかない。というのも、私がいまいるスウェーデンでは、経済が必ずしも日本より良いというわけではないのに、一向に深刻な気配は感じられないのである。

先日、企業からの招待で、ローストランドというスウェーデン唯一の磁器メーカーを訪問した。そこは既に、フィンランドの企業、ハックマンの翼下にある。

また、スウェーデンを代表する二大ガラスメーカー、オレフォシュ、コスタ・ボダも実はデンマークのビール会社カールスベルグが株主である。オレフォシュにロイヤルコペンハーゲンの磁器を展示した一角があり、不思議に思って尋ねてみると、同じカールスベルグの経営だからということだった。

食器もガラスも、代表的企業のどれもが外国企業に買収されている。日本ならパニックになりそうな話だが、こちらではそういうことはない。それが特別なことではなく、ありふれたことだからだろう。

ふと思い立って身の回りの物を見てみたら、なんと、ほとんどが外国製で、スウェーデンの物はわずかである。

白一色の磁器のカップや皿はドイツ、フランス、それにスウェーデンの家具メーカー、イケヤがタイやポルトガルで作らせたもの。プラスチックのサラダボウルはデンマーク。フライパンはイタリア。ナベはフィンランドのハックマン。包丁はイケヤがフランスで作らせたもの。スウェーデン製は缶切りと炒(いた)めものに使うプラスチックだけである。

ボールペンはフランス、アメリカ、日本製で、スウェーデン製は無し。ノートは、さすがに森の国で、ほとんど国産だが、なぜかオランダの物がある。

彼らは、自分たちの身の回りの物のほとんどが外国の物で占められていることに、慣れっこになってしまっているようだ。

食品も、乳製品とポテト以外はほとんどが輸入物だし、テレビもアメリカの番組をはじめ、諸外国の番組が、すべて字幕付きで大量に放映されている。外国語の修得には実に良いのだが……。

学生たちには必需品の携帯電話も、彼らのお気に入りにはフィンランドのノキアである。日本製の物も、カメラや車など、もうすっかりこの国に溶け込んでいる。

つまるところ、この国は経済のトップグループと共に走ることなく、外国の製品や文化をたっぷり享受し、老人や子どもや学生など無産階級に手厚い保護を与え、人間のためのデザインのトップランナーであり続けようとしているのだろう。

それにしても、裏付けとなる経済が、底をつき始めたという話も耳にしたが……。

(今年夏までの約一年間、スウェーデンに留学。いったん帰国の後、再びスウェーデンに留学中)